中村幸彦著述集

第二卷

©一九八二

中村幸彦著述集　第二巻

定価六五〇〇円

昭和五十七年六月一日印刷

昭和五十七年六月十日発行

著者　中村幸彦

発行者　高梨茂

印刷者　青木勇

発行所　中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七

振替東京二―三四

検印廃止

中村幸彦著述集　第二巻　近世的表現

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

前言　七

古典は古典／時代的表現／文学生活図／時代様式観／読解の枠としての時代的表現

第一章　場について　三〇

号のある文学／場の様々㈠／場の様々㈡／約束と型／作法書／通と評判記

第二章　俳言とその流れ　七〇

文語文学と口語文学／俳言の宣言／狂歌ともじり／擬物語とその余流／雅と俗／口語詩の失敗と最底辺の文学／日本語の宝箱

第三章　口頭話体の様相　一〇七

口頭話体／仮名草子の口頭話体／西鶴の話術／八文字屋本の演劇調／舌耕文学と戯作／三馬と可楽

第四章　型の文章　一四七

文章の型／擬古文、和歌／漢詩文／再び和文について／俗文㈠　俳文、狂文／俗文㈡　小説、戯曲／二重性と場

第五章　西鶴の即物主義　一九三

即物主義／本意本情／談林の風俗詩／虚と実―寓言論／西鶴の

実／西鶴と芭蕉／西鶴がくだれる姿／余情と余意
第六章　俳諧の客観性　二三一
蕪村の客観句／蕉風の客観性／芭蕉における客観性の浄化／鬼貫の場合
第七章　修辞の形式　二六五
引用文と諺など／揃え、尽し(一)／揃え、尽し(二)　取合せ／もじり、地口
第八章　構成の特色　二九八
訳文／翻案／吹寄、へんちき論／見立／趣向
第九章　類型と個性　三三九
馬琴の性格表現／八文字屋本の性格／道化、荒事、幽霊／再び馬琴の性格描写について／等類とおっかぶせ／様式、形式の類型／類型の中の個性—名人芸
後　語——近世と近代の間——　三七九
幕末文壇における近代的傾向／近代における近世的表現
後　記　四一三
書　誌　四一八

近世的表現

前　言

一

古典は古典

「近世的表現」なる書名は、「近世文学の時代的表現」と換言できる。文学は芸術の一、文学史も芸術史の一つであるに心付けば、その表現の時代的特色や、時代と共に変化する様相やその理由の検討は、考えれば当然必要である。しかし日本文学では、この種の研究は誠に乏しい。この多少変わった研究テーマを、自分の研究対象たる近世文学史の中に、私が如何なる過程で設定して来たかを、この書の始めに語って置くことは、この書を書き進めるためにも、読んでいただくためにも後々に都合がよいかと思う。

私が学校の教壇に立ったのは終戦後である。昭和二十年代の学生諸君は、文学評論と国文学的研究をよく混同した。というのは冷淡な言葉である。彼らはもっと切実であった。提出された論文を、それは評論であって、学問的客観性がないと批判すると、自分がその古典から与えられたもの、現在自分の把握したものを打出す外に学問があるか。先生達の方こそ不真面目で、何をやっているか。学問的客観とは何ぞやと切り込んで来た。困った私は一事に考え付いた。当時住んで居た大和の旧家や社寺の庭には、古寺の礎石を手洗鉢などに利用しているの

を時々見た。それを例に引いて、あの庭の主人には、その礎石は、鑑賞用実用上にも、手洗鉢として好ましい存在である。あの石の現代的価値はそこにあるが、それは考古学的意味とは関係ない。あの石を何寺の何時頃の礎石なるかを明らかにし、その当時の環境の中に置くことで、その価値を考えるのが考古学である。日本の古典文学と国文学研究との関係もその如しなどと話した。その頃学生達と話し合ったことを、やや後に同じような聴衆に試みた講演草稿の一部分を次に掲げて見る。

○

日本のものでも外国のものでも、私どもは今、現代作品より、古典文学の方を多く読んでいる。明治は遠くなりにけりで、明治の文学も次第に注釈を必要とし出した。「古典」なる言葉は、やや相違した二つの概念からできている。上の「古」の字に重点を置けば、古い本の意、下の「典」の字に重点を置くと、現代生活にも「典」即ち手本となる本の意となる。古くて且つ現代にも生きている本である。よって現代の作品と同様、読者は好きなように読んでよい。逆に言い改めると、古典として優れた、選ばれた書物は、後世人に、たとえ誤解されても、好き好きに読まれる運命を負ったものなのである。「いのち嬉しき撰集のさた／さま〳〵に品かはりたる恋をして」という付句があるが、勅撰集の恋歌に、恋の典（手本）を見出すのも勝手である。歴史的にも、文学面のみでなく人生万般で、多くの手本を与えて来たのが古典である。

中国の最も古い書物の一、『詩経』には、断章取義[二]と称するその詩句の使用法がある。『礼記』や『孝経』に、その説が出ていて、『左伝』の古くからその例も見える。『詩経』の詩句の二三句をわざと意味を変えて使い、有効な外交辞令とするなどである。「詩は活物也」と唱えて、この方法を大いに論じた人が中国にも日本にもあったという。これは意識して変えたのであるが、真面目に誤解した場合も多い。それで最高の効果を上げた例もあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

る。芭蕉は杜甫、西行、宗祇を尊敬し、その影響を受けたことは、自らも述べて、文学史上有名な事実である。彼は杜甫を、和刻本のあった『杜律集解』など注のある本で理解したらしいが、この本は今の学問から見れば、いや芭蕉死歿の頃からして既に評判の悪い本で、その本によった芭蕉の理解は誤っていたことになる。杜甫も、西行、宗祇も、芭蕉が理解したような脱俗的な自然詩人ではなかった。皆複雑な一筋縄では行かない人物であったことは今日では明らかである。しかし芭蕉はそのように誤解した古人の影響をもって、貞門談林の余流を浄化して、蕉門を樹立した。芭蕉が自己流に読んで成功した例から見ても、古典はすきな様に読んで一向支障がない。しかしその読解が、古典の真実であったか如何かは別問題である。芭蕉の古人の把握は、学問的に客観性を持った理解でなかったことも事実である。この種のものを古典の個人的又は、それぞれの時代で現代的な読み方といってみれば、この現代的読み方とは、古典を自分の方へ近付けて読む方法である。今日でも評論家諸氏が、一般読者に対して、自分の懐く自信のある文学観をもって読み解釈して、その面白さ、その価値を論ずるに、この方法を採用する。今日の評論が、純粋に研究的営みでなく、むしろ創作的営みと見なされる所以は爰にある。よって評論的読み方と称してもよい。

「古典」の文字に即すれば、それは「典」の方に重点を置いた読み方ともいえる。それならば、「古」の方に重点を置く読み方もあるべきである。これは読者自らを古典の方へ出来るだけ近付けてする読み方である。古典は各々その成立した時代を持つ。その成立時の古典そのものとして理解しようとする努力である。（ここで前述した礎石の考古学の例を引用して）古典を対象とする国文学研究もその如く、古典が古典でなく、生身で息吹いていた時代へ、我々が立戻って、その作品を、その当時の如く理解するのが、古典の学であり、国文学研究である。

◇

古い講演の中で、評論的読み方なる称を使用したが、かかる読み方は、今日のみでなく、それぞれの作品が古典として経て来た何時の時代にも存在したのである。国文学史の一角に評論史なるものがある。一作品については、影響史、研究史などと称されるものの中にも含まれている。『万葉集』が、代々に、どう理解、批評、研究されて、それぞれの時代の作品に如何に影響したかを調査する類である。芭蕉に於ける西行、宗祇の如く、それぞれの評論、模倣はまたそれとして文学史的事実であって、研究資料ともなり、無視できないこと言うまでもない。今ここに『源氏物語』の影響史を、きわめて簡単に繙こう。中世では、これを仏教的な勧善懲悪的文学として読むべきだと論じた人がかなりある。近世の初めに儒教的勧懲論をきびしく持した山崎闇斎の如きは、誨淫の書、年少の者に読ますべからずと論じた。これにも賛成者はある。元禄期の契沖は、詞花言葉を翫んだもの、人情を述べたものとして読むべしとした。賀茂真淵や、その影響下の上田秋成らは、一種の人情説ながら、時代を諷した寓意を含むものと見ていた。本居宣長は「物のあはれ」説を展開する。以上を歴史的事実として検討すると、皆その時代の思想界の動向から出た文学観にもとづく当代的読み方であるといってよい。本居宣長の如く古典にできるかぎり即そうとして、これこそ最も根拠ある文学観だと、自信を持った人の説でも、国学者としての彼の在り方が反映して、当代的であった。代々の現代的読み方を一々肯定していては、『源氏物語』の本質がぐるぐる変わるか、『源氏物語』が諸説の前で四分五裂してしまう。昭和十年代後半の戦争中に現われた、『源氏物語』は風紀紊乱の書だなどの説が出て来てもやむを得ないことになる。学問的であっても、異説はいくらも出る。論争も多いが、真実への帰一を目的とすべきである。自分の文学観で読むことを出来るだけ引込めて、『源氏物語』が出現し、それを作者がどう思って作り、その時代の読者がどう思って読んだか、真実が唯一つしかない時点まで、研究者自身をさかのぼらせて、その真実を見極めることで、客観的な理解に到達しない限り、国文学研究は

科学にはならないであろう。という風に、その講演は続いて、いくつかの例を示して、結論は次の如くなっている。

○

更に考えて、様々の視野と方法をもって、作品が生きていたその時代に於ける、真実の文学性をつかむことに努力すべきである。努力はそれを可能にするであろう。その学問的真実が明かになれば、我々は古典は古典であって、現代の作品とは異質的であることを明確に知るであろう。その異質と対決することによって現代を豊かにしてこそ、古典が本当に典であり得るのではないか。日本人は今迄、日本の古のものも、外国のものも、今風に日本風に都合よく採り入れることを得意とした。文学の古典の影響史、受容史もそれを示している。そうした安直な対応の仕方では、それを加えて出来上る文化そのものがかぼそくなるのではないか。異質との力強い対決あってこそ、本当の受容影響が得られるのではないか。こう言えば、時代を隔てた過去の文学の真に、果して我々が逼り得るであろうかと、疑念が生じる。しかし文学はつまる処、人間の問題である。人間の精神には、東西古今に通じる普遍性がある。すぐれた文学はその髄において、その普遍性の流入し充満した作品である。それであってこそ時代を経て今日に残っている。我々の精神にそれに応じ得る普遍性があることに自信を持とう。かかる発言は、普遍性によるなら、現代の文学観、自己の感覚を発動させてなぜ悪いの論が再発しようが、自己や現代の文学観は何時でも発動出来る。技術的に可能な限り古典に肉薄することの方が先決である。古典語一つを取っても、それもその時代風に正確に読む程、理解正しい方向に狭められるではないか。その作品の正しい理解の方向に、あらゆる面で、研究者自らを狭めて行った上でも、自己の発動は遅くはないのである。

◇

また、別の「表現の時代性」なる講演（『兵庫国漢』第十二号所収、昭和四十一年三月）で次の如くも言っている。

○

近頃のある種の文学史家には、封建時代の文学を扱いましても、上代の文学を扱いましても、どの時代においても、何か近代に似たようなものに高い評価を与える傾向があります。とくに封建時代の文学史、すなわち近世文学史をやりますと、非封建的で近代的なものが高い評価を与えられ、封建時代のいかにも封建時代らしい文学が、下等な文学であるように評価されがちであります。また、そういうふうな文学史観があるようでありますけれども、私は、それは歴史に忠実な方法ではないと考えております。

ともかくも、封建社会では、その時代の文学がいかに封建的であったかを研究するのが、研究の第一段であります。もちろん、おのずから、いかに非封建的なものの芽が、どういうふうにして萌えあがってきたかも研究の範囲に入って来ますが、それのみを対象にして、封建的であったことをないがしろにしておりましたら、非封建的なものも正当にはつかみ得なかろうと思います。

◇

以上の如く常識的な言葉を使用しているのは、当時の学生達から、以上の如き私の発言について、この種の疑問が出たことへの答のつもりであったかと思う。

二

時代的表現

昭和二十年代の後半に入ると、国文学界には文学史研究が流行し出した。これは上代は勿論、後の時代まで、皇室に関するタブーが外され、諸々の資料の検討が自由になって、一度に息吹き出した

国史学の発達に刺戟を受けたものであった。そのためもあったのか、多くの論文が、私には文化史的なものと認められた。しかし戦前昭和十年代の文化史の流行、和辻哲郎、阿部次郎など哲学畠の人々が日本文学へ関心を持った頃の論文とは様相が変わっていた。それは昭和十年代では峻別していた唯物史観的な考え方が、文化史的態度の中に自然の如く加わっていた点である。しかしその唯物史観的な考え方が、戦前の如く論理的に厳しいものではなく、何か常識的理解に止まっているかに見えた。どうもこれは、当時の文壇の、それは一部分であったが、文学論に共通している如くにも思われた。かかる現象の出現するのには、早くからの国文学界に原因が存した。明治以来の国文学界には、芳賀矢一が文献学的方法を輸入するなど、種々の方法が試みられたが、多くは古典操作の技術的なことばかりであって、最も中心の文学性を論ずる時には、その時代時代の、もっと厳密に言えば、その研究者が文学的洗礼を受けた時の文壇の流行に大きく左右されて来た。『戯作論』（本著述集8）の「前言」にも述べてあるが、明治から昭和の初めにかけては、日本の文壇では表現を軽視して、内容や思想を重視する風が一般的であった。時には若干留意すべき作家作品があっても、文章や表現は付属的にしか考えなかった。文壇の評論かくの如く、国文学の研究もかくの如くである。昭和十年代の文化史的傾向は、文壇の影響支配を、もっと学問的なものに乗り替えようとした試みであったが、それも哲学や史学の影響下にあったために、表現にまで立ち入ることが益々乏しくなったのも当然である。むしろ表現に係わるのを幼稚視していたのではあるまいか。その風潮が、戦後の昭和三十年代までも持続していたのである。その頃からやや後に、近世文学の表現について、一般向に講演した時（「近世文学について―その表現の特色」大東急記念文庫第八回文化講座シリーズ、昭和四十年一月）、その前詞として、その頃を顧みつつ話した中に、次の如き部分がある。

○

文学とは、何時、何処の国のものでありましても、風月花鳥を見ては欣喜し、嘆息し、恋や嫉妬、野心とその成否に悲喜交々する、時には世相や境遇に憤りを発する類のものであると言ってしまえば、皆同じだとなりましょう。西田幾多郎先生は、あの『レ・ミゼラブル』について、長い原本を読むよりは、黒岩涙香翻案の『噫無情』で読めば、十分だと語られたそうです。これは先生のような偉い方に生ずる伝説の一つかもわかりませんので、真偽の程は保証いたしません。が、そうした読み方でも、主人公ジャンバルジャンの生涯と事件の展開も知れ、作者ユーゴーのその作品に托した思想も窺われましょうから、それでよいではないかとする見解も、一理ありましょう。しかし小学校の先生が、私をモデルにして描いてごらんと描かせた画が、よくもこれ程違ったものだと思われる程に、一人の先生の顔が様々になっている。同類の感情、同じ素材でも違ってあらわれるのが芸術であることも事実であります。明の袁中郎なる詩人が、人の心はその面の相違する如くに皆違っていると言う意味の古い言葉を引用して、作品の個性の尊重を論じましたが、芸術文学はそれぞれ違う所が面白いのだと言う見解も亦一理でありましょう。『源氏物語』はむつかしいから、与謝野源氏や谷崎源氏で読む、これも結構。読まざるにまさること数段でありますが、やはり苦労してでも源氏の原文を見れば、又本物の味があると言う話をよく聞きますが、そうだろうと思います。上手な訳本でも、本物の味は中々に出せない様に、一々の作品がそれとしての特色を持っています。伝説の西田先生のような行き方で、思想や作中人物の生き方を主に読むのを哲学的と言えば、あとの方の、相違を認める行き方は、芸術的とでも言ってよいのでしょうか。

ひどく当然のことを申しましたが、それでは、時代時代でその時代の作品の特色があるものか、あれば何処に見出されるかの、当面の課題に入ってゆきます。近世の西鶴や近松の作品は、近頃はよく読まれているようです。注釈書が整って、言葉の上の困難は一応克服してくれますが、それだけで十分その文学性が理解出来るかと言う

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com